

のちの児童向け武者絵本類に影響を与えた。(小池正胤)

訓蒙図彙

すいもう 日本最初の啓蒙的な挿絵入り百科事典。中村陽斎の編、江戸前期、一六六六年(寛文6)に

京都の山形屋が公刊した。二〇巻一四冊。天文・地理・居處・人物・身体・衣服・宝貨・器用・畜獸・禽鳥・

竜魚・虫介・米穀・菜蔬・果蓏・樹木・花草など一二八項目にわたり事物の名称を列挙して、一つ一つ正名・異名・和名・俗称を記し、その形状を図示してある。版を重ねて庶民の間に普及したのみならず、「武具

訓蒙図彙」(一六八四)、「女用訓蒙図彙」(八七)、「人倫

吟遊詩人

ぎんゆう 中世フランスのトルヴァードゥール

などの類書を輩出した。(石川松太郎)解に基づいた訳語として日本で使われていることばだが、誤解するべきものである。トルヴァードゥールは、現在でいうシンガー・ソング・ライターであり、宫廷お抱えの芸術家であった。したがって、宫廷付抒情詩人と訳されるべきものである。フランスでは、放浪しつつ、歌い、演奏した旅芸人は、ジョングルールと呼ばれ、トルヴァードゥールとは全く別の立場であった。

(小澤俊夫)

ク

寓 話

ぐうわ ラテン語で、つくり話を意味する *fabula* の訳語として、明治期に考案されたことばであろう。ヨーロッパで寓話の始祖とされるのが、紀元前六世紀のアイソップス(イソップ)の寓話である。イソップはフリギア人で、その寓話がギリシア語で記録された。それは約四〇〇編の短い話で、完全に擬人化された動物が登場人物となっている。内容は処生訓ないし、人生の隠れたる真実を解き明かす話である。一世紀になると、ラテン語による寓話が書かれ、中世には、各國にイソップ寓話が広がった。教会が、説教用にイソップ寓話を用いたからである。それが、イエズス会の宣教師によつて日本にもたらされたのが、天草本『イソボのハブラス』(一五九三)である。これは、ヨーロッパの文学が日本語に訳された最初のものである。現在、日本の口伝え昔話の中に、イソップ寓話によく似た話が散見されるが、それはこの翻訳が、長い年月の間に、

人々の口に下りてきたものと考えられる。フランスでは一七世紀になると、ラ・フォンテーヌが、韻文による『寓話』二四〇話を公刊した。彼はイソップのみならず、古代インドの『パンチャタントラ』などからも素材を求めて、処生訓というよりも、文学の一つのジャンルとしての寓話をつくりあげた。現在フランスでは、寓話といえば、ほとんどラ・フォンテーヌの作品を指す。フランス以外では、イタリアのピニヨッティ、スペインのイルアルテ、イギリスのJ・ゲイ、ドイツのレッシング、ロシアのクルイローフらが寓話を書いている。いずれも啓蒙思想の盛んな時代で、民衆の間で口伝えされている、非合理的で、教訓性のない昔話は排斥すべきものと考えられ、代わって、教訓豊かな、人生の役に立つ話を、優れた詩人たちが、寓意を込めてつくり出さなければならないと考えられていたのである。

(小澤俊夫)

寓話劇 (ぐわくげき) 昔話にその題材を求めるながら、それとは別種の寓意によつて構成された、一八世紀ヨーロッパの演劇あるいは戯曲の一種。イタリアの喜劇作家ゴツツイのいくつかの作品や、ドイツロマン派の作家ティーアの『長靴をはいた牡猫』(一八九七)は、その代表的なものである。ティーアのそれは、いうまでもなくペローの昔話に取材したものだが、その本質的な特色はロマン的アイロニーを駆使した一種の演劇論である。一方、ゴツツイの寓話劇は、バジーレの昔話集『Lo canto de li canti お話のお話』に取材したもののがかなりある。たとえば『L'amore delle tre melarance 三つのオレンジへの恋』『Il corvo 鳥』『鹿の王』などがそれであるが、それらはいずれもコンメディア・デ・ラルテの方法によって、それに反対する立場をとつていたビエートロ・キアーリとカルロ・ゴルドーニの演劇の方法を露骨に批判したものであった。(安藤美紀夫)

郭沫若 (モールオ) 一八九一—一九七八 中國の詩人、劇作家、歴史学者。四川省の小地主の家に生まれ、幼少年の時から詩文に親しむ。日本に留学、九大医学部を卒業するが耳が悪いため医師となるのを断念、文筆に生きる決意をする。処女詩集『女神』(一九二二)をはじめ、『少年時代』(一九)、『創造十年』(一九三三)など自伝小説、童話劇『広寒宮』がある。史劇『屈原』(一九三七)は日本でも上演。学術論文に『中国古代社会研究』(一九三〇)がある。中國文化界の第一人者として活躍した。(水上平吉)

草川信 (くさかわ しん) 一八九三—一九四八(明治26—昭和23)作曲家。長野市に生まれ、一九一七年、東京音楽学校甲種師範科を卒業、長野師範に奉職。また山田耕筰に師事し、「赤い鳥」その他に童謡の作曲作品を発表した。『搖籃の歌』(北原白秋詩)、『汽車ポッポ』(富原薰詩)などの作品があるが、『夕焼小焼』(中村雨紅詩)がことに有名で、いくつもの記念碑が建てられている。一般に

* 唱歌スタイルの長音階の歌いやすい曲が多い。作品集

に『草川信童謡曲集』五集（一九二三）（一四）、『草川信童謡全集』第一集（三一、二集未刊）があり、幼少期回想『思い出の記』（七四）がある。

（金田一春彦）

草双紙

うさぎ 近世（江戸時代中期）、一七一六年（享保

1）ころより一八六七年（慶応3）まで、江戸を中心に出版された絵入り小説の総称。体裁は当初は縦一八センチ、横一三センチ、五丁（一〇ページ）を単位としていた。表紙の色と内容によつて「赤本」「黒本」「青本」「黄表紙」「合巻」に分ける。「赤本」は草双紙初期の作品群で『舌きれ雀』『兎大手柄』などの童話や、『初春のいわひ』など社会生活を題材とし、読者は主として子どもであった。「黒本・青本」は一七四〇年代にはじまり、童話の有名な歌舞伎・淨瑠璃、歴史上の事件や人物を脚色し、赤本より題材も広く内容も緻密になつた。「黄表紙」は一七七五年（安永4）『金々先生えいがせん』から『花夢』からで、都会的な鋭いがちや風刺を効かせた滑稽な内容が多く、題材も「黒本・青本」からさらに広がり当時の社会生活や事件を取り入れた大人の読み物となつた。寛政改革以後敵討ちものが増え長編化する傾向になり、一八〇六年（文化3）の『浅草音書』（浅草音書）、『利益仇討雷太郎強悪物語』が合綴して出版したため「合巻」と称し「黄表紙」に変わつた。仇討ちや情話・伝奇など内容は多種で、挿絵は一層繊細美麗になり、とくに婦女

子の読み物として明治まで続いた。

【参考文献】鈴木重三『絵本と浮世絵』（一九七九 美術出版）

小池正胤他『江戸の戯作絵本（一四統）（二）（一九八〇）』 社会思想社、鈴木重三・木村八重子他編『近世子どもの絵本集』（一九

八五 岩波書店

（小池正胤）

草野心平

（明36） 詩人。福島県石城郡上小川村に生まれる。慶應大学を中退後、正則英語学校で英語を、善隣書院で中國語を学んだ。

一九一九年には中国に渡り、嶺南大学に入学、この中国での生活が心平の詩に大きな影響を与えることとなつた。二五年臘写刷りの同人雑誌『銅鑼』を創刊、三五年には詩誌『歷程』を創刊。新聞記者や屋台の焼鳥屋などの職業を転々としながら、詩作を続け、詩集『富士山』、『日本砂漠』、『亞細亞幻想』がある。自然と人間の心象を天真爛漫にうたいあげるその詩の世界は、その天真爛漫性のゆえに子どもたちの心に通い、教科書などに採られることが多い。無名の宮沢賢治を発見、評価し、賢治の影響で童話にも筆を染め、童話集『三つの虹』（一九四九）がある。

（矢崎節夫）

葛原 茵

（しげはら 一八八六年（明19）昭36）

童謡詩人。広島県生まれ。東京高師英文科を卒業後、精華小学校に勤務。そのかたわら雑誌『小学生』（少年世界）（幼年世界）の編集に携わり、その後、跡見高女、山脇高女、女子音楽学校、中央音楽学校などで教鞭を

執つた。戦後は郷里広島の至誠女子高校長を務めた。その間、唱歌・童謡を数多く創作し、生涯に書いた唱歌・童謡は一二〇〇編に及ぶともいわれている。唱歌においては、一九一五年から二九年までに作曲家の梁田貞、小松耕輔とともに『大正幼年唱歌』全一二巻、『大正少年唱歌』全一二巻を制作・編集した。童謡においては、教育的童心主義とも呼ばれる「ニコニコピング主義」に立脚して、文学性よりも教育性と音樂性を重んじた、平明で單純な作品を数多く書いた。『夕日』『夢見花』『ギューピーさん』などの作品がよく知られている。また、江戸時代の箏曲家葛原勾当の孫という立場を生かして箏曲童謡というユニークな領域を開発した。童謡集には『かねがなる』(一九二五)、『葛原しげる童謡集』(三五)、『雀よこい』(五六)などがあり、童謡を論じたものとしては『童謡の作り方』(二二)、『童謡と教育』(二三)、『童謡教育の理論と実際』(三三)がある。童謡のほか『姫百合小百合』(二二)など少年少女小説や童話劇も出版、また母校を中心とした大塚講話会の創設者の一人として口演童話の普及にも貢献した。

【参考文献】『ニコピング先生葛原幽追悼集』(一九六四 角川書店)

楠山正雄
(畠中圭二)
一八八四—一九五〇(明治二五—昭和二十五)

児童文学者、演劇評論家、編集者。東京銀座に印刷業を営む家に生まれたが、三歳で父を亡くし親戚に預け

られ転々するなど、苦難の少年時代を送った。国学院に入り、のち、早稲田大学に転学し英文学科卒業。島村抱月の影響を受け、その指導で、早稲田文学社に入り、同学の秋田雨雀、相馬御風らと、『文芸百科全書』(一九〇九)を編集。同年、坪内逍遙の文芸協会に入り、演劇人としての道を歩みはじめるが、一方では、読売新聞文芸記者を経て、逍遙の推薦で富山房に入り、編集者となつた。かたわら、早大講師として近代劇を講じ、劇評を書き、戯曲を発表。文芸協会解散後は、抱月の芸術座の幹事を務めた。一九一五年から富山房の『模範家庭文庫』の企画編集に当たつたが、画家岡本帰一らの協力を得て、三二年までに全二四巻を刊行。我が国の児童出版史上、最も優れた装本といわれる豪華版シリーズをつくつた。このシリーズの中に、『新釈イソップ物語』(一六)、『世界童話宝玉集』(一九)、『日本童話宝玉集』上・下(二一—二二)、マロ作『少年ルミと母親』の五冊を編訳しており、このシリーズの仕事は、彼の代表的な業績として知られる。このほか、学年別『画とお話の本』六巻、『サルトカニ』『イソップものがたり』『大男と一寸法師』『おやゆび姫』『源氏と平家』『青い鳥』(二五—二六)、『日本神話英雄譚宝玉集』六巻(四二—四五)などを富山房から出し、古典の再話者、児童読み物の作者、編集者として、優れた仕事を残した。この仕事は『世界おとぎ文庫』(四九一)、『ア

ンデルセン童話全集(五〇〇)、として晩年まで続けられたが、ともに死によつて中絶、未完に終わつた。ほるぶ出版刊『日本児童文学大系』第一巻(七八)に『小太郎と小百合』など作品四編と瀬田貞一による解説と年譜を収録。講談社学術文庫に代表作『日本童話宝玉集』が『日本の諸国物語』ほかの四分冊(八三三)として收められている。

【日本童話宝玉集】(ほんどうじゆうしゆ) 日本の昔話、説話、古典の再話を集成した正雄の代表的著述。『模範家庭文庫』の一〇、一一冊目の上下一巻として一九二一年一月(上巻)、一二二年四月(下巻)刊行。その後、そのつど改訂を加え、一巻にまとめた『巨人版・日本童話宝玉集』(三八)、上中下の三巻本(四八)として刊行。歿後は子息楠山三香男の編集により『講談社学術文庫』に四巻本(八三)として収録されている。
〔富田博之〕

グッドリッチ サミュエル Samuel G. Goodrich

一七九三—一八六〇 コネチカット州生まれのアメリカの作家。ピーター・ペーリーをペンネームとする。幼少時に『赤頭巾ちゃん』をはじめとするフェアリー・

テールを読んだことをきっかけに、大人が子どもに与えようとする恐怖にあふれた空想の世界と相対する本の作家。ピーター・ペーリーをペンネームとする。
〔定松 正〕

一七九三—一八六〇 コネチカット州生まれのアメリカの作家。ピーター・ペーリーをペンネームとする。幼少時に『赤頭巾ちゃん』をはじめとするフェアリー・テールを読んだことをきっかけに、大人が子どもに与えようとする恐怖にあふれた空想の世界と相対する本の作家。ピーター・ペーリーをペンネームとする。彼はハンナ・モアの信奉者で、その文学的スタイルをまねて一七〇巻に及ぶ膨大な数の著作を発表した。彼の興味の的は主にインフォメーション・ブックで、歴史、地理、伝記、自然などの分野で活躍し『Tales of Peter Parley about America』ピーターパーリーのアメリカ物語(一八二七)をはじめとした旅行記(冒険あり、歴史的探訪あり)はその後も国を越えて続いた。またその壳れゆきの良さをも反映してイギリスでもこのパーリーをまねた偽パーリー本が現れる現象も生まれた。子どもへの教訓は生涯を貫いた精神で、一八二二八—三四年には雑誌、「ザ・トーケン」、三三三年から「パーリーズ・マガジン」を企画・編集した。

〔島 弐子〕
クーニー バーバラ Barbara Cooney 一九一七—アーティストの女流絵本作家、挿絵画家。チモーサーの『カントベリー物語』に材を取つた『Chanticleer and the Fox チャンティクリアときつね』(一九五八)でコールデコット賞を受賞。D・ホールの『にぐるまひいて』の色の特色を最大限に生かし、スクラッチボードなど多様な画法でも知られる。ほかに昔話、童謡の本の挿絵など、その活動範囲は広い。

〔国木田独歩〕(くにきだ) 一八七一—一九〇八(明治4—明治41)
詩人、小説家。本名哲夫。千葉県銚子生まれ。父は竜野藩士。明治政府に仕えた父に従つて、岩国、広島、山口に転居、山口中学を中退して、神田法律学校を経て東京専門学校(現早稲田大学)英語科、政治英語科などを

に学んだ。一八九一年植村正久により受洗、徳富蘇峰を知る。校長排斥運動に加わって中退、山口県麻郷村に帰り波野英學塾を開いたが、翌年再上京して文学への関心を深め、ワーズワース詩集を愛読、「青年文学」を編集。九三年より『欺かざるの記』を起筆。九月、生活の必要から大分県鶴谷学館教頭として弟收二を連れて赴任したが、翌年七月、また上京して国民新聞に入社、日清戦争に従軍して『愛弟通信』を寄稿して一躍文名をあげた。翌年帰国して『国民之友』を編集するが、佐々城信子との熱烈な恋愛、周囲の反対を押し切つて結婚したが半年後、信子の家出によつて離婚。その後、宮崎湖処子、田山花袋、太田玉若、松岡(柳田)國男らと『抒情詩』を刊行。九八年榎本治と再婚。一九〇一年第一文集『武藏野』を出版した。独歩の小説は人生の哀傷をすなおに抒情的に書くところから『源叔父』『春の鳥』などは青少年にも広く読まれた。少年読み物としては『鹿狩』(一八九八・八「家庭雑誌」)、『非凡なる凡人』(一九〇三・三「中学世界」)、『馬上の友』(〇三・五「青年界」)、『山の力』(〇三・九「少年界」)などがある。

クーパー サザン Susan Cooper 一九三五)

女流児童文学作家。イギリス生まれでアメリカ人科学者と結婚して、アメリカで出版している。「サンデータイムズ」の記者を務めながら、五部作の第一作『光の

六つのしるし』(一九七三)を発表。これはアーサー王伝説を土台に、若者の精神的葛藤と成長、闇と光の戦いという普遍的問題をテーマとする。四作目の『灰色の王』(七五)は、ニューベリー賞を受賞、ファンタジーとして高い評価を得ている。

(越智道雄)

クーパー フェニモア J. Fenimore Cooper 一七八九～一八五一 アメリカの作家。『開拓者』(一八二三)、『モヒカン族の最後』(二六)、『太平洋』(二七)など

の『皮脚絆物語』五部作ほかで知られる。作品は子どもに向かって書かれたものではないが、アメリカの未開拓地とインディアンという野性的な素材を扱う冒險的な物語は、行動的な子どもの心を捕らえるものとなつた。子どもが大人の手から奪い取つたともいえるのが、クーパーの場合である。『開拓者』からはじまる五部作では、辺境の地へと向かう老開拓者ナッティ・バンボーが続けて登場する。たとえばイギリス軍の砦ガチックとともに旅をする指揮官の娘を助け、悪だくみを続けるマグワを最後に倒すと、再び辺境の地へとさすらっていく。このように構成はややありきたりで、文体も荒けずりだが、しかし波乱に満ちた冒險の連続がよく子どもの心に訴えたのである。クーパーは父のモヒカン族では、バンボーはモヒカン族の酋長チンガインディアンと仮軍に攻撃される話である。最後のモヒカン族では、バンボーはモヒカン族の酋長チンガチックとともに旅をする指揮官の娘を助け、悪だくみを続けるマグワを最後に倒すと、再び辺境の地へとさすらしていく。このように構成はややありきたりで、

(浜野卓也)

大を中退したあと、商船に乗り、海軍士官になつたりしのちにそのころの体験を書くことからはじめて、やがて開拓期のアメリカに取材するようになつた。アーヴィングと並ぶアメリカ初期の大きな作家で、アメリカ以外でも広く読まれた。

(谷本誠剛)

久保貞次郎(くぼ じょうじろう) 一九〇九(明42) 美術

教育家。栃木県足利市生まれ。一九三三年東京大学文学部教育学科卒業。欧米に留学中、ウイーンの児童画研究者フランツ・チゼックの理論と実践に触れ、帰国後、画家北川民次と日本の美術教育の改革をめざして四七年創造美育協会を設立。子どもに対する一切の権威や抑圧を排し、子どもの解放と自由な創造をめざして創造美育運動を推進し、美術教育の実践に多大の影響を与える。『児童画の見方』(一九五四)、『子どもの創造力』(五八)、『児童画の世界』(六四)などの著書がある。

(上野浩道)

久保喬(くぼ たかよ) 一九〇六(明39) 児童文学

作家。本名隆一郎。四国宇和島の商家に生まれる。時計商の家業についたのち文学志望に転じ上京。同郷の先輩古谷綱武の紹介で太宰治を知る。東洋大学東洋文学科へ進むが中退。児童図書出版社へ勤め、かたわら二反長半らの児童文学同人誌「少年文学」(一九四〇)に参加、児童文学の道に進む。処女長編童話『光の国』(四三)戦後改作『ネコネコの子』(六六)をはじめ、『ビ

ルの山ねこ』(六四 小学館文学賞受賞)、『かしの木ホテル』(六四)、『海はいつも新しい』(六七)、『赤い帆の船』

(七二 日本児童文学学者協会賞受賞)。『少年の石』(七二)、『南の島の子もりうた』(七三)、『火の海の貝』(七三)、

『黒潮三郎』(七六)、『さるがかいた本』(七七)、『少年の旅ギリシャの星』(八〇)、『戦乱のみなし子たち』(八五)そのほかがあるように、低・中・高学年向きの短編、長編、歴史小説とその範囲は広い。また、ノンフィクションにも通曉している。さらに児童文学評論個人誌

『プラスコ』(六七～七三)の発行、『太宰治の青春像』(八三)と評論にも意欲的である。作者の第一作をはじめ、協会賞の作品も海洋をテーマとしていて、このジャンルのものも多いが、一方、小学館受賞作にもみられるように都会を扱った作品も同様に多い。こうした作品は、荒々しい自然―野性と、洗練された大都市―近代性という異なる世界のものであるが、その融合、

統一が常に試みられていて、久保文学の特色といえる。また、これらは受賞作などのようによく昇華し、成功している。作風は常々自身も書いているように、現実を通して夢、リアリズムを経たロマンティシズムともいうべき描き方で、科学性と空想性の重視といえよう。また、童話は人生の「原理」であると主張しているのも、真摯な人柄をそのまま投影している建設的な文学観である。

「少年の石」のいし
少年歴史小説。一九七二年、新日本出版社刊。街のビルのそばに落ちていた亀の子の形をした小さな石が、古代から現代に至る時間の中で、さまざまな子どもと交流したさまを九編の物語に仕立てた連作。第一話『火と土の子ら』から第九話『少年の橋』に及ぶそれぞれの話では、時に自然と戦い、時に権力と戦う少年少女が生き生きと描かれている。リアリズムとロマンチズムの融合したところに、新しい歴史小説としての価値を認めることができる。

久保田宵二

くぼた しゆうじ一八九九～一九四七(明32～昭22)(神戸淳吉)

童謡詩人。本名嘉雄。岡山県生まれ。日本大学国文科卒。小学校勤務ののち、日本音楽著作権協会常任理事、関東航空副社長などを務めた。一九二〇年ごろから童謡を書きはじめ、二六年、童謡詩人会に入会、その後雑誌「コドモノクニ」「乳樹」などに作品を発表した。リズミカルな、語調のよい作品が多い。童謡集に『ねねの小雀』(一五)、「宵二童謡集」(三二)、童謡論集に『現代童謡論』(二三)があるほか、綴方教育についての著書もある。

(畠中圭二)

久保田万太郎

まんたろう一八八九～一九六三(明22～昭38)

劇作家、小説家、俳人。東京浅草の袋物製造販売の商家に生まれ、慶應大学文学部を卒業。慶大在学中の一九一一年に处女作の小説『朝顔』を「三田文学」

に発表、同じ年に雑誌「太陽」の懸賞募集に戯曲『プロローグ』が入選して、学生作家としてデビューしたが、この处女作二編とも少年の世界を扱っているのが注目される。万太郎は俳人としても知られるが、生まれた土地浅草の浅草寺境内に歿後建てられた句碑の句は、少年時代を回想する「竹馬やいろはにはへとちりぢりに」というのである。幼少時の印象や体験が、創作の大きな比重を占めるという資質の作家があり、児童文学の作家などに、そういうタイプの人が多い。万太郎は児童文学を専門とする作家にはならなかつたが、数多くの優れた童話劇の作品を残しているのは、そうした天性の作家的資質を開花させたものとみることができよう。万太郎の童話劇の多くは、雑誌「赤い鳥」の鈴木三重吉の勧めによって書かれたといつてよいが、万太郎自身にも、それを書く資質と、内的モチーフとがあつたのである。「赤い鳥」には四四編の童話劇が掲載されたが、その半数を超える二三編が万太郎の作品だった。それらの作品の多くは、海外の作品の翻案や脚色だというが、それを感じさせない作品といつてよいものが多い。中でも、『おもちゃの裁判』(一九二二)、「北風」のくれたテープルかけ』(三五～三六)、「こうして豆は煮えました』(四八)などは、広く上演され、戦後の検定国語教科書にも収録された。戦前には伊藤烹煎の表丁、舞台美術による豪華本、久保田万太

郎少年少女劇集『一に十二をかけるのと十二に一をかけるのと』(三七)が出ていて、主な作品を収めている。その他数種類の童話劇集が出ているが、久保田万太郎童話劇集『北風のくれたテーブルかけ』(八二)が主要作品を収め、詳しい解説をついている。中央公論社版『久保田万太郎全集』第九巻(六八)でも、ほぼ全作品を読むことができる。

【一に十二をかけるのと十二に一をかけるのと】
にをかけるのとじゅうにいちらをかけるのと
万太郎の主な童話劇九編を収めた童話劇集。一九三七年刊、中央公論社。収載作品は『北風のくれたテーブルかけ』、『ふくろと子供』、『ロビンのおだいさま』、『春のおとづれ』、『ミルクメイドの踊』、『おもちやの裁判』、『雨のふる日はわるいお天気』、『対話三つ』と表題作。主として「赤い鳥」誌に発表された作品群である。伊藤嘉朔の舞台装置図、衣装図、さし絵、裝丁も、すぐれたものとして定評がある。

【参考文献】富田博之『久保田万太郎の童話劇』(一九八一 東書

児童劇シリーズ『北風のくれたテーブルかけ』収載)(富田博之)

久保雅勇（まよお） 一九二五(大14) 童画家。

山梨県に生まれ、陸軍航空士官学校を卒業。復員して画家を志し、黒崎義介に師事して童画研究会に参加。

*日本児童出版美術家連盟結成メンバーにも加わり、二期にわたり理事長を務め、現在は現代童画会事務局長。小林純一作『茂作じいさん』(一九八〇)ほか多くの挿絵

や絵本を手がけているが、紙芝居にも『どうぶつやまのクリスマス』(高橋五山賞絵画賞受賞)など多数の作品があり、また紙芝居独自の絵画指導にも力を注いでいる。
(上地ちづ子)

熊谷元一

（くまがい もといち）

一九〇九(明42)

—

童画家、

写真家。長野県に生まれ旧制飯田中学校卒。一時小学校教師もしたが、一九三一年より武井武雄の推薦で絵雑誌『コドモノクニ』に童画を発表する。素朴で枯淡の味をたたえる画風である。絵本では『あの村この村』(一九四三)、『二ほんのかきのき』(六八)ほか多数。一方戦前より写真による山村記録を意図し『会地村』、農村の写真記録(三九)、『一年生』(五六)などがあり、農村研究・児童生活史上的貴重な資料となっている。

久米井束

（くめい つがね） 一八九八(明31)

文学教育

家、児童詩教育研究者。香川県に生まれる。香川師範を卒業して上京、小学校訓導、校長、視学などを歴任。その間「椎の木」同人として詩作、一方一九二九年『樹は如何に自ら激渦と天に伸びるか』などを著し、児童詩教育者としての独自の道を歩む。戦後は文学教育運動にも関与して、学校図書館協議会会長、日本文学教育連盟の会長などを務める。主著『創造的詩教育』(一九四八)、『主体を創造する文学教育』(六六)など。

久米元一 げんいち 一九〇一～七九(明35～昭54) 編集者、翻訳家、作家。旧筆名は舷一。東京市赤坂溜池生まれ。父徳太郎(陸軍歩兵少将、最終は弘前旅団長)の長男。東京の高千穂高等商業学校を結核で中退、すなわち不肖の子であった。このころ受洗。投稿時代を経て、一九二三年より「金の星」の斎藤佐次郎に認められた。妹艶子、百代も同誌の投稿少女であった。父の死もあって同年末には水戸から母とともに上京。金の星社に勤めた。前後して同誌上に常時創作、翻案を発表。併行して、大正末からの円本合戦に投じた社のために尽瘁し、「リンコルン」「ジャンバルジャン」(二六)、「少年探偵家物語」「漂流二百三十日」(二七)、「少年発明家物語」(二八)と次々訳述した。三〇年代になると独立し、講談社系の雑誌などへ舞台を広げている。戦後に再開、童話集『殿様になつた五助』(四七)、児童劇集『歌えぬうぐいす』(四九)、少年少女小説『湖底の王冠』(五三)と続々刊行、五〇年代には稻村一作・東野正雄・豊玉某などのペンネームを併用して、月十数本以上の連載をもち、「児童読物に久米元一時代」(高野正巳)を画した。著訳書二〇〇冊という。夜型でオートバイ・海外旅行・ダンスを愛し、水府流は達人。作風はこれに見合つて冒險もの・海外雄飛ものが目立つ。翻訳家の久米穰は長男。

(宮崎芳彦)

久米宏一 こういち 一九一七～(大6) 童画家、

版画家。画家久米修一の子として東京に生まれ、豊島師範卒。下町の小学校に勤務のかたわら、漫画誌「カリカレ」同人として子どもスケッチなどを寄稿、一九三九年中國に渡り、四年現地召集を受け、敗戦後シリヤで抑留生活。四九年帰国。日本児童出版美術家連盟理事、日本美術会会員、童画ぐるーぶ「車」同人。七六年『やまんば』『黒潮三郎』(共に七六)で小学館絵画賞受賞、多数の挿絵、絵本のほか、画集『朝市・これども・恐山』(一九七四)がある。

(箕田源一郎)

久米修二 くみじゅうじ 一八八八～一九二九(明21～昭4) 挿絵画家。広島市山口町に生まれた。県立中学を卒業して上京。白馬会研究所で洋画を学んだ。制作意欲を書籍の装丁や挿絵やポスターをつくることに発展させた。「櫻の実」など児童雑誌に挿絵を描き、ドイツ語版の賀川豊彦著『死線を越えて』、日本民話集『菊さんの鏡』の装丁・挿絵を描いている。杉谷代水著『アラビアンナイト』(一九二九)の装丁・挿絵が絶筆であった。

(久米宏一)

久米正雄 まさお 一八九一～一九五二(明24～昭27) 小説家、戯曲家、俳人。長野県上田市の生まれ。福島県立安積中、一高を経、東京大学英文科卒業。中学時代から俳句に親しみ、三汀は俳号。大学時代の一九一四年、第三次「新思潮」に戯曲『牛乳屋の兄弟』を載せ、好評を得た。一六年、第四次「新思潮」に小説『父

の死』、『手品師』、『競漕』などで一部識者に認められた。のち夏目漱石の長女筆子との失恋体験を素材とした『螢草』(一九一八)、『破船』(二二)で文名を高め、人気作家となる。速筆で、感覚の清新さと感傷性に満ちた文章に特徴があった。児童文学作品も多く、「赤い鳥」のほか、「少年俱楽部」や「少女俱楽部」、小学館発行の学年別学習雑誌によく載った。才人久米には、何でも一応こなせる能力があり、初期「赤い鳥」に寄せた『熊』『うそ』『泥棒』など、読ませるものももつ。少年少女小説の分野でも活躍し『青空に微笑む』(三四)、『二葉のクローバー』(五〇)などがある。(関口安義)

クライドルフ Ernst Kreidolf 一八六三～一九五六 スイスの絵本作家。石版工として出発のちミュンヘンで絵を学ぶうち、健康を損ねてバイエルンの山中に引きこもる。この転地がきっかけとなって、身近の美しい草花や虫たちを素材に、詩画集ともいうべき独自のスタイルの絵本をつくり出した。処女作は『花のメルヘン』(一八九八)。繊細な詩人の魂が、自然に対する正確な観察の目と、印刷技法についての十全な知識に支えられて最も望ましい形での自己実現を遂げたものといえよう。二五冊の絵本のうち、主なものとしては『草原の小人』(一九〇一)、『ふゆのはなし』(一四)、『アルプスの花物語』(一一)、『花を棲みかに』(一六)、『妖精たち小人たち』(一八)など。また詩

人のデーメル夫妻の童謡集によるものとして『Fibelzeltze フィツツェブツツェ』(一九〇〇)がある。世纪の変わり目のいわゆる絵本の黄金時代から今に生き残っている稀有な作家の一人である。(矢川澄子)

クラウス ルース Ruth Krauss 一九一一～ アメリカの詩人、絵本作家。高校を中退、ピアノとバイオリンを習い各地の美術学校で学ぶ。コロンビア大学で人類学を専攻。絵本画家クロケット・ジョンソンと結婚、二人で共作した絵本に『ぼくのにんじん』(一九四五)などがある。センタックと組んだ絵本作品が多く、『あなたはほるものおつこちるところ』(五一)、『うちがいつけんあつたとき』(五二)、『シャーロットとしろいうま』(五五)、『おふろばをそらいろにぬりたいな』(五六)など。(松居直)

クラウチ マーカス Marcus Crouch 一九一三～ イギリスの児童文学研究家、批評家。ロンドン大学卒後、ケント州で図書館司書を務め、新刊書評誌「ジュニア・ブックシェルフ」誌に書評を書く。二〇世紀イギリス児童文学を展望した『Treasure Seekers and Borrowers 宝さがしと借り暮らし』(一九六一)と『The Nesbit Tradition ネズビットの伝統』(七一)が主著。カーネギー賞受賞作家についての記録『Chosen for children 子どものために選ばれる』(五七、改訂六七、再改訂七七)を編纂、民話や神話の選集もつくつてい

る。

倉金章介 しらかね 一九一四～七三(大3～昭48) 漫画家。本名虎雄。良行の筆名も用いた。山梨県に生まれ市立甲府商業高校卒。在学中より「少年俱楽部」などに投稿をはじめ一九三〇年上京、『どりちやんバンザイ』を発表する。田河水泡門下で同門に長谷川町子などがいた。戦前「新少年」などに作品を寄せたが四年から五四年にかけて「少女」に連載した『あんみつ姫』が爆発的な人気を呼ぶ。五三年度第二回小学館絵画賞を受賞した。

(藤本芳則)

クラーク キヤサリン Catherine A. Clark 一八九二～一九七七 カナダの児童文学作家。イギリスに生まれ、教育を受けた後、カナダのブリティッシュ・コロンビア州に移住。カナダにおける最初のファンタジー作家の一人。『The Golden Pine Cone 金の松かさ』(一九五〇)をはじめ、六冊のファンタジー作品がある。

ブリティッシュ・コロンビアの山や湖を舞台に、インディアンの神話や伝説に基づき、カナダ特有の生物、水人、岩の精などを登場させて、カナダの風土に根ざしたファンタジーの世界を創造した。
(桂 育子)

クラーク メイビス Mavis T. Clark 生年不詳 オーストラリアの児童文学作家。一〇代後半から執筆はじめ、多作の作家として知られる。オーストラリア児童文学界では珍しく、第二次大戦中の国内を舞台

(高桑啓介)

とした作品を多く発表。初期の作品ではテーマが複数であったのに對し、奥地の入植者の家庭を題材とした彼女の代表作、『The Min-Min ザ ミン・ミン』(一九六七)は、テーマが一つにしばられ、年間優秀作品に選ばれるなど、高い評価を得た。
(越智道雄)

倉田白羊 くらだ 一八八一～一九三八(明14～昭13)

洋画家。本名重吉。浦和市に生まれ東京美術学校西洋画科卒業。浅井忠に師事。「方寸」誌に参加。太平洋画会、初期文展に入選。著書『洋画手ほどき』(一九一二)を刊行。院展洋画部同人、春陽会創立会員として、農漁村の生活風景を手堅い写実で描いた。『武俠世界』に挿絵を描いたほか、『孝子絵巻』(一四)などに優れた挿絵を描いている。山本鼎の児童自由画教育、農民美術運動に協力。晩年は長野県上田市に住み、図画教師らを指導した。著書に『雑草園』(一四)、『美育断片』(一七)などがある。

(小崎軍司)

倉橋惣三 くらはし 一八八二～一九五五(明15～昭30)

幼児教育の研究家、教育学者。静岡市に生まれる。東京帝国大学文科大学哲学科心理学専攻卒業(一九〇六)。元良勇次郎に師事し、同大学院に進み児童心理学を研究。東京女高師講師を経て同校教授となり、同校附属幼稚園主任を兼任。かたわら、「婦人と子供」(のちの「幼児と教育」)の編集に當たる。欧米留学(一〇～一二)後は「コードモノクニ」「キンダーブック」の編集顧問も

務める。児童読み物や玩具に関心が深く、文部省推薦児童図書の選定委員として活躍、玩具叢書中に『玩具教育論』(三五)を執筆。また、紙芝居、人形劇を保育に生かす実践をした。お茶の水女子大学教授、同校名譽教授など歴任。戦前は文部省の社会教育官、日本幼稚園協会の主幹として、戦後は教育刷新委員会委員、日本保育学会創設者として、幼児教育の発展に尽力した。

* * *
 ベスタロッチやフレーベルの精神をくみながら、幼児保育の真諦は、子どもの「生活の中での生活を、生活にまで導く」ことにある、という独自の自然主義保育理論を開いた。

(長戸優子)

クラピーヴィン ウラジスラフ・П. Vladislav

Петрович Крапивин 一九三八-) ソビエトの児童文学作家。生まれ故郷のウラル地方で大学在学中からピオネール少年団組織の指導に携わるかたわら、ジャーナリストを経て作家活動に入り、精力的に作品を発表している。『風に立つ少年』(一九六五)、『友だちになりたいな』(七八)、『兄さんの子守歌』(七九)など、子どもの身近な生活を題材に友情と勇気を訴える作品群と、夢と空想のあふれたファンタスティックな作品群がある。

クラムコール ジョゼフ Joseph Krungold 一九〇八~八〇 アメリカの児童文学作家、映画プロデューサー。『... and Now Miguel』などで、ミゲルは』(一九五三)と『Onion John タマネギ・ジョン』(五九)で、二度もユーベリー賞を受ける。これらは、『Henry 3 ハンリーオ』(六七)とともに、同一世代の少年たちを追った二部作。第一作がニューヨーク州の伝統的社會、ついでニュー・ジャージー州の小さな町、最

ゆる分野で活躍し、内外で数々の賞を受けた。動物、とくに犬と猫のイラストは天下一品で、シリーズ切手もある。ドイツで出した『ねこ、ねこ、こねこ』(一九六七)ブル作)は日本でロングセラーとなっている。代表作『Franek フラネク』(六八 コノプロニツカ作)、『Wiersze dla Kajii カヤの詩』(七〇 クルモバ作)など多數。

(内田莉莎子)

後に大都市郊外をそれぞれ舞台にして、現実に生きる少年たちの心の葛藤と成長を、外界と対応させつつ描いた。なお彼は映画の脚本家、プロデューサーとしてのキャリアも長い。

(原 昌)

グランヴィル Grandville 一八〇三～四七 フランスの版画家。本名はジャン＝ニヤス＝イジドール・シェラール。新聞に政治風刺を描いたのち同時代人を動物の姿で風刺した『Scènes de la vie privée et publique des animaux』(動物たちの私的生活情景) (一八四二) を発表、従来の挿絵の概念を大きく打ち破った。絵を中心に物語が構成されている『もう一つの世界』(四四) は、一九世紀パリの鏡の向こう側を描き、テニエルの『ふしぎの国のアリス』の挿絵に影響を与えた。

(新倉朗子)

クリアリー Beverly Cleary 一九一六～ アメリカの児童文学作家。思春期の小説や動物物語も書いたが、最も人気の高いのは、『がんばれヘンリーハン』(一九五〇)、『ラモーナは豆台風』(六八) のシリーズ。現代のありふれた子どもたちを登場させ、

日常生活の一コマ一コマをユーモラスに生き生きと描いた。我が国でも好評で、とくに後者は、N.H.K.テレビで、『わんぱく天使』として連続放映されたことがある。一九八三年に、日記と手紙形式で少年が自己発見をしていく姿をユーモラスにたどった『ヘイショーエ

んへの手紙』でニューベリー賞を受ける。(原 昌)

クーリッジ スザン Susan Coolidge 一八三五～一九〇五 アメリカの児童文学作家。本名サラ・

チャーンシー・ウールジー。オハイオ州クリーブランドに生まれる。六人兄弟の長女として知りで裕福な家庭に育ち、幼いころから物語や詩を好んで書いていた。

女子寄宿学校での教育を終えた後、一八七〇年から本格的な作家活動に入り、一八七二年に出版された『What Katy Did』(ケイティーは何をしたか) で児童文学作家としての地位を固めた。アメリカの中流家庭を舞台に、作者自身の兄妹をモデルにした六人の子どもたちがのびのびと活躍するこの物語は、やがて

『What Katy Did at School』(ケイティーは学校で何をしたか) (一八七三)、『What Katy Did Next』(ケイティーは次に何をしたか) (八六) をはじめとする四冊の続編が書き継がれるにしたがって、『若草物語』のシリーズにつぐ高い人気を得るようになつた。日本では松原至大訳『ケティ物語』(一九二七)ほかの訳書がある。

(横川寿美子)

グリーナウェー ケイト Kate Greenaway 一八四

六～一九〇一 イギリスの絵本作家、挿絵家、画家。ロンドンで名の知れた彫版家で図案家の父の二女に生まれる。幼年期にノッtingham州の小村ロウルストンの親戚の所へ母と身を寄せ、二年あまり暮らす。その後

もしばしばそこを訪ね、その田園の風景と生活がのちに描く絵の背景と世界を決定づけた。一二歳から画塾に通い、南ケンジントン女子美術学校やスレイド美術学校で学ぶ。一二歳で絵をはじめて展覧会に出品、はじめは父の手伝いや紹介で各種カードの絵を描いていたが、絵入り新聞に絵が買われ、当時最も有力な彫版家エバンズに会い、自作の詩に絵を添えた原稿をすぐ本にしてもらい、処女作『窓の下で』(一八七八)が出る。これが空前のヒットでその後『誕生日の本』(八〇)、『マザー・ケース』(八二)、『キンセンカの庭』(八五)、『エイ・アップル・パイ』(八六)、『ハメルンの笛ふき男』(八八)など、また一八八三年から九七年まで(九六年を除き)毎年暦を出した。手入れ良く、美しい花咲く、上天気の庭に、屈託なく遊び戯れ、歌を歌う子どもらを描いた子どもの樂園の絵は、高名な美術批評家ラスキンの強い支持を得、ヴィクトリア時代の理想を代弁している。

(吉田新一)

クリーバー ベラ&ビル Vera & Bill Cleaver アメリカの児童文学作家。ベラはサウスダコタ生まれ。ビルはシアトル生まれ。一九四五年に結婚。六七年、共同著作の『Ellen Grae エレン・グレー』を発表し、

若者の間に彼らの名を広めた。のち『百合の花咲く谷間』(一九六九)、『グローバーくん』(七〇)、『The Trial Valley』トライアル・バレー(七七)など確実に作品を発表している。アメリカの山岳地方を背景に、若き主人公は容易に解決できぬ現実に直面しながら生き続ける。方言、地方色を巧みに盛り込み、物語を単なる苦労話に終わらせないところに特徴がある。(島式子)

栗原一登 かずと (明44)

劇作・演

出家。福岡県生まれ。一九三一年小倉師範第一部卒。四〇年日本大学芸術科卒、同助手、のち専任講師。この間、伊藤道郎、伊藤嘉朔に師事。四五年敗戦後のいわゆる墨塗り教科書に代わる新しい教科書づくり(国定教科書最終版)に参加、石森延男の依頼でへよびかけなどの演劇教材を数多く執筆。以後は光村図書の国語教科書編集など。四年劇団子供町、石森延男作『もんくうふおん』(咲き出す少年群)を脚色・演出。五二年新制作座、真山美保作『泥かぶら』演出。五五年東童『泣いた赤鬼』脚色・演出。五八年新児童『コタンの口笛』脚色。七八年オーケストラによる合唱組曲『北九州』(園伊玖磨作曲)、ついで『横須賀』『唐津』と、組曲三部作を発表。日本児童演劇協会会長、アシテジ日本センター会長、文部省教育課程審議会委員などを務める。著書に『演劇の門』(一九四七)、脚本集『青空』『星と鬼たち』(四八)がある。

(田島義雄)

栗原 登

のりはら 一九〇〇(明33)

教育者

*児童劇作家。千葉県生まれ。千葉県東金小学校に勤務、篠崎徳太郎とともに童謡劇を指導、公開試演会を開き、篠崎と共に著の『童謡劇』二冊(一九三三~四)を出す。

のち東京市の小学校に勤務、学校劇研究会に参加、『児童劇選集』二巻(三三~三三)、『創作新学校劇』(三七)などを刊行。ほかに『学校の父』(四二)、『先生と僕たち』(四三)などの教育記録や児童向け読み物の著書が多い。戦後は千葉県船橋市の教育長を務めた。(富田博之)

グリパリ ピエール Pierre Gripari 一九一五 フランスの作家。パリで働きながら小説や戯曲など、奇想に富んだ作品を書いている。昔話や伝説の世界の住人が新しい活力を得て登場する楽しい物語集『木曜日はあそびの日』(一九六七)や、人生の真実を秘めた劇的な幻想物語『ピボ王子』(七六)、ことばの響きが美しい『Piripipi, deux sirops, une sorcière』ピルリピピ、二杯のシロップと一人の魔女』(七八)など、無尽の想像力ときめくユーモアを特色とする多彩な児童文学を発表している。

(谷 恭子)

グリーペ マリア Maria Gripe 一九三三~ スウェーデンの児童文学作家。ストックホルム郊外に生まれ、哲学・宗教史を学ぶ。一九五四年から作品を発表、六歳の女の子の内面をきめ細かにつづった『小さなジョセフィーン』(一九六一)で認められる。深く人間を

みつめた心理描写、優しさと風刺が微妙に交じった独特の筆遣いで、子どもたちの悩みや安らぎ、孤独、幻想、周囲とのかかわり合いの中での自己実現を描く。ヒューゴとジョセフィーンの三部作(六一~六六)、『森の少女ローエラ』(六三)、『夜のパパ』(六八)、エルビスのシリーズ五巻(七一~七九)など現代ものが多い。また、北欧神話を下敷きにし郷土色と濃密な神秘に彩られたファンタジー『忘れ川をこえた子どもたち』(六四)や、中世北欧が舞台の、自分らしい生き方を模索する少年王の物語『鳴りひびく鐘の時代に』(六五)のようないきなりした。

グリム兄弟

グリム

きょうだい

Brüder Grimm

ドイツの言語学者、昔話収集者。兄をヤーコップ(Jacob 一七八五~一八六三)といい、弟をヴィルヘルム(Wilhelm 一七八六~一八五九)というが、二人合わせてグリム兄弟と呼ぶことが多い。それは、二人が生涯の大部分をともに暮らし、多くの著作を共同で執筆しているからである。二人はハーナウで生まれ、六人兄弟の長男と次男として育つた。ともにカッセルで高校を終え、マールブルク大学に入り(兄は一八〇二、弟は一八〇三)、法律学を学んだ。二人はともにカッセルの図書館に勤め(弟は一四年から、兄は一六年から)、一八三〇年、ともにゲッティンゲン大学へ招聘された。そして三七年、ハノーファー

国王の憲法廢棄に抗議した、いわゆる「ゲッチャンゲン七教授事件」に連座して、ともに罷免されている。四〇年二人はベルリンへ招かれ、アカデミー会員、ベルリン大学教授となり、死が二人を分かつまで、ともにベルリンで暮らした。

二人は生涯の大部分をともに過ごしたが、二人の性質は異なっていた。兄のはうが活動的、論理的で、同時代の政治にもしばしばかかわった。一四年には外交的な問題でパリに赴いているし、一五年にはウイーン会議に加わっている。また四八年にはフランクフルトで開かれたドイツ国民議会に参加し、憲法の作成を論じている。一方、弟はことばに対する繊細な感覚と優れた感情移入の能力に恵まれ、外よりはむしろ内に向かっていた。そのことは、弟が手を加えた昔話集の初版から七版に至る変化をみると、よくわかる。この加筆によつて、「ケーリムの昔話」というものが確立され、以後の昔話収集中に大きな影響を及ぼした。一人が共同で書いたものは、『子どもと家庭のための昔話』(一一)のほかに、『ドイツ伝説集』(一六)『Irische Elfenmärchen』アイルランドの妖精メルヘン』(一六 共訳)、『Deutsches Wörterbuch』ドイツ語辞典などがある。

この辞典は、二人が生きている間には第一巻(五四)しか出なかつたが、その後、代々のドイツ語学者に受け継がれ、第二次世界大戦を越え、東西両ドイツの学者

の協力により、一九六一年に完成したもので、一六巻三二二冊からなる大辞典である。個別的な著作としては、兄に『Deutsche Grammatik』ドイツ文法(一九一三七)、『Deutsche Rechtsaltertümern』ドイツ法律古事誌(一八八)、『Deutsche Mythologie』ドイツ神話学(三三五)、『Geschichte der deutschen Sprache』ドイツ語史(四八)などがあり、弟に『Altdänische Heldenlieder, Balladen und Märchen』古デンマークの英雄歌、バラード、昔話(一一)、『Die deutsche Heldensage』ドイツ英雄伝説(一九)、『Rolandslied』ロ兰の歌(三三八)などがある。

以上のことから分かるように、二人は『子どもと家庭のための昔話』を子どもの本として書いたのではない。古代研究の一環として昔話の収集をはじめたのである。二人は、「昔話は神話のかけらである、昔話には太古にさかのぼる信仰の名残がある」と信じていた。そしてそこにドイツ文学の源を探つていたのである。庶民の間に口から口へと伝えられてきた昔話は、それまで価値を認められていなかつたのであるが、それをはじめて受け取り、はじめて学問的に扱つたのがクリム兄弟である。二人の後に統いて、世界中で昔話の研究がはじまつた。しかし、この本は版を重ねることに、弟によつて手を加えられ、しだいに子どもの読み物としての趣を増していく。それが、家庭の中で子ども

の立場を認めた、一九世紀の市民社会に迎えられ、やがて世界中に広まつたのである。今や、『聖書』、レーニンの著作とともに、世界中に最もよく普及している本の一つに数えられている。したがって、グリムは民俗学の基礎を築いたばかりでなく、子どもの読み物としての昔話の手本をつくり出し、以後の児童文学に深い影響を及ぼした。

今に残る最も古いグリムの昔話の日本語訳は、一八七八年四月に出た、桐南居士（管了法）訳『西洋故事神仙叢話』である。この本は『灰かぶり』『金の鳥』など一〇話を收めているが、英語からの重訳のようである。

同年九月には、呉文聰訳『八ツ山羊』が出ているが、これは仕掛け絵本である。同じ話が、八九年には上田萬年によつて訳されているが（『おほかみ』）、これも重訳である。八八年以降、「女学雑誌」「幼年世界」「幼年雑誌」「少国民」「少年世界」など子ども向けの雑誌を通じて、多くの話が紹介されている。忠実な翻訳といふより、子どもに対する教訓を中心とした再話といったようなものが多い。挿絵も、登場人物が和服をまとうなど、日本化されていた。明治も末ごろには選集のようなものが増えてくる。一九〇六年の橋本青雨訳『独逸童話集』は二八話を收め、一九年の和田垣謙三・星野久成訳『家庭お伽噺』は五八話を收めている。大正時代になつてもこの傾向は続き、一六年の中島孤島訳

『グリム御伽噺』には四一話が收められている。そして一四年にはじめて全訳が出た。金田鬼一訳『世界童話大系』、第二卷独逸編(1)グリム童話集、『同書』、第二三卷独逸編(2)グリム童話集、グリム以後の童話集』（一九二七）。金田訳は、改訂を重ねて今も岩波文庫で目にすることができる。第二次世界大戦後には、個別的な話を絵本につくることが盛んになった。八五年のグリム生誕一〇〇年を機会に、それまで出回っていた高橋健二訳、相良守峯訳、植田敏郎訳に加えて、池内紀訳、池田香代子訳など新たな翻訳がいろいろと出ている。

「子どもと家庭のための昔話」^{【ブルック】}ためのメルヘン

Kinder und Hausmärchen

初稿一八一〇年ごろ、初版第一巻

一二年、第二卷一五年、第三卷注釈編二年、第七版（最終版）五七年。最終版には二〇〇編の昔話と一〇編の子どものための聖者伝が收められている。二〇〇話のうちには、伝説や笑い話のような話もかなり含まれており、本格的な昔話（魔法昔話）は八〇話足らずである。『ヘンゼルとグレーテル』『灰かぶり』『赤ずきん』『いばら姫』『白雪姫』など名高い話はすべてこの魔法昔話に属するが、これら名高い話の主人公はほとんどが女性である。一つにはグリムに話を伝えた人たちが、主に女性であつたせいかもしれない。ところで、近ごろの研究はグリムに話を伝えた女性のうち主な人々がフランス系であったことを明らかにしている。とする

と、グリムの昔話は生粋のドイツの話である、という通説が疑わしくなつてくる。事実、『灰かぶり』『赤ずきん』『いばら姫』はペローの昔話集（一六九七）にある。けれども、フランスの文学史家アザールが黒パンの味にたとえているように、グリムの話はドイツ的としかいいようがない。つまりそれは、グリムに話を語つた人々によつてではなく、話をしあげたグリムによつてもたらされたものなのである。

【参考文献】高橋健一『グリム兄弟』（一九六八 新潮社）、谷口幸男他『現代に生きるグリム』（一九八五 岩波書店）（野村 泰）クリヤンガ ヨン Ion Creangă 一八三九～八九 ルーマニアの作家。ルーマニアの東部モルドヴァ地方の農村に生まれ、師範学校卒業ののち、小学校の教師となつた。はじめは、学校での教材として書いた民話がその独創的で豊かな内容のゆえに高く評価され、次々と創作民話を発表した。『Capra cu trei iezi』三四の『コヤギ』（一八七五）、『Punguta cu doi bani』二枚の銅貨入りの財布』『Dănilă Prepeleac タニラ・プレペリヤク』『Povestea porcului アタの話』（以上七六）、『Povestea lui Harap Alb ハラブ・アルブの話』『Fata babei și fata moșneagului ばあさんの娘とじいさんの娘』（以上七七）などは今日でもルーマニアの子どもたちの愛読書となつてゐる。クリヤンガの創作民話は、ルーマニア、時にはヨーロッパの民話と共に通のテーマ、

（直野 敦）

クリユス ジュームス James Krüss 一九二六～ ドイツの児童文学作家。ヘルゴラントに生まれ、兵士として第二次大戦に参加。戦後リュネブルクの教育大学を卒業し、ハンブルクで新聞、ラジオ、テレビ、レコードなどで盛んに活躍した後ミュンヘンに移る。ケストナーに才能を認められ児童文学に向かうよう激励される。児童物語『ザリガニ岩の灯台』（一九五八）がまず人々の注目を引く。近代的なものをリアリスティックに描きながら想像の世界に入々を導き入れる手法が鮮やかである。『Die Glücklichen Inselhinter dem Wind』風のうしろのしあわせの島』二巻（五八、五九）のように空想豊かでユーモアにあふれる作品もある。『ひいじいさんとぼく』（五九）はマルチン少年が話もうまく詩もつくるひいじいさんに七日間話を聞き、話しかけや詩のつくり方などを習う物語である。こうしてマルチンはことばの使い方や話の組み立て方から言語感覚まで教え込まれる。この作品は翌年ドイツ児童文学賞を受ける。『笑いを売った少年』（六一）は自

クリーン

分の体験が背後にある作品で、映画化され、ソビエトで数百万部も売れた社会性のある作品である。こうしてクリュスには児童のために小説が二〇もある。『*3 an einem Tag*』一日に三かける!』(六三)にはドイツ絵本賞(六四)が授けられる。その他の絵本のテキストも多数書かれている。クリュスは戦争を憎み、ヒューマニスティックな色彩が濃く、教育的な内容を美しくリズミカルな文章や詩に包んでいる。こうしてクリュスの全作品に対し国際アンデルセン大賞(六八)が授けられる。クリュスはまたステイブンスンやレオニアなど外国の児童文学作家のものを翻訳し、ケストナーの作品を劇化し、児童のためにラジオやテレビの脚本も書いている。『*So viele Tage, wie das Jahr hat*』一年の日数だけ』(五八)で優れた児童詩を編集し、『*Naivität und Kunsterstand*』素朴と芸術理解』(六九)では児童文学理論を開拓している。

(植田敏郎)
グリーン アレクサンダー *Александр Грин* 一八八〇—一九三三一ソビエトの作家。本名アレクサンドル・С・グリネフスキイ。ウラル山脈に近いビヤトカ県(現キーロフ州)の貧しい家に生まれ、学校を出ると海にあこがれてオデッサにいく。船乗りになる夢は果たせず各地を放浪していろいろな職業を転々とする。その後革命運動に身を投じ、投獄、流刑を何度も繰り返し、獄中で作品を書きはじめる。革命後は赤軍に入隊

するが、チフスにかかり困っているところをゴーリキーの援助でペトログラード(現レニングラード)で住居と職を得る。「一九」四年からクリミアに移住し、二年に肺がんで死去。代表作『深紅の帆』(一九一三)は、孤独な少女アツソーリがいかか赤い帆をつけた船が迎えにきて、夢の国へ連れていくてくれる信じているのを知った若いグレイ船長がそれをかなえてやる物語。『輝く世界』(二四)、『波の上を駆ける女』(二八)といつたその他の作品も、夢と冒險に満ちた空想的色彩が濃い。

(中込光子)

グリーン ロジャー・L Roger Lancelyn Green

一九一八—イギリスの作家、児童文学研究家。一八〇〇年以降のイギリス児童文学を史的に扱った『*Tellers of Tales*』物語の語り手たち』(一九四六)や、『*五一スター・パン*』の上演史『*Fifty Years of Peter Pan*』(一九一九年)では児童文学理論を開拓している。

(植田敏郎)
グリーン アレクサンダー *Александр Грин* 一八八〇—一九三三一ソビエトの作家。本名アレクサンドル・С・グリネフスキイ。ウラル山脈に近いビヤトカ県(現キーロフ州)の貧しい家に生まれ、学校を出ると海にあこがれてオデッサにいく。船乗りになる夢は果たせず各地を放浪していろいろな職業を転々とする。その後革命運動に身を投じ、投獄、流刑を何度も繰り返し、獄中で作品を書きはじめる。革命後は赤軍に入隊

(高桑啓介・吉田新二)

クルイローフ イワン・А Иван Андреевич Кроль.

OB 一七六九—一八四四 ロシアの寓話作家。モスクワで将校の家庭に生まれたが、幼くして父を失つたた

めに、役所勤めなどをしながら文学やフランス語などを独学した。若いころから悲劇、喜劇、風刺的作品を発表したが、代表作は二〇〇編以上に及ぶ『寓話詩集』全九巻（一八〇九—四三）である。これらの作品は、オリジナルの寓話のほか、イソップ、ラ・フォンテーヌの作品の改作で、いずれも詩の形式で書かれ、動物などを登場させて專制政治に対する風刺、社会の偽善への鋭い皮肉で貫かれている。中でも幼い子どもたちにも理解できる『白鳥とかますとえび』『おながざるとめがね』など、多くの寓話がさまざまな形で出版され、クリローフはソビエトの子どもたちから“おじいさん”と呼ばれて親しまれてきた。また、寓話の中の名句がことわざのように日常会話や作品の中に使われ、今日に生きている。

(松谷さやか)

ぐるぐる話

(ばなしぐる)

別に「積み上げ話(accumulative stories)」ともいう。代表例にイギリス昔話「おばあさんと子ぶた」がある。おばあさんが六ペニスを手に入れ、市場で子豚を買うが、子豚が柵を越えたがらない。

そこで犬に子豚に噛みついてくれと援助を頼むが聞いてくれない。で、棒に犬をぶってくればと頼むが聞いてくれない。火に棒を燃やしてくれと頼むがまただめ。次は水、さらに牝牛、肉屋、縄、ねずみ、猫と、前のをやつづけてもらおうとぐるぐる頼む。やつと猫がミルクをもつてくればと条件を出し、牝牛にミルクを頼

むが、枯草をもつてくれればといわれ、やつと枯草を入れて、上の順序を逆もどり。で、子豚は犬に噛まれまいと柵を飛び越えた。同類話にイギリス昔話の「猫とねずみ」「ムナチャヤとマナチャヤ」、マザーグースの歌の「これはジャックの建てた家」など、創作幼年童話でフラックの『おかあさんのたんじょう日』などがある。

(吉田新一)

久留島武彦

(たけひこ)

一八七四—一九六〇(明治—昭和三十五年)

口演童話家。旧豊後森藩主の家に生まれる(現在の大分県玖珠町)。関西学院神学部を卒業。近衛師団歩兵第一連隊の兵役中に日清戦争に従軍、その体験を尾上新兵衛の筆名で博文館の雑誌「少年世界」に投稿、連載され、編集長だった巖谷小波を知る。以後、小波の主宰する木曜会同人となり、生涯兄事し、その影響を受ける。神戸新聞、大阪毎日新聞の記者を振り出しにジャーナリストとなるが、そのかたわら、一九〇三年には、横浜の教会を会場に、はじめてのお伽噺の会を開き、六年内には、お伽噺(口演童話)を中心、子どものための文化運動の推進を目的とする団体「お伽俱楽部」を創立。これを母体に、毎月一回の「お伽講話会」を開き、一年からは機関誌「お伽俱楽部」を刊行して、全国各地に「お伽俱楽部」を発足させ、子ども文化運動の推進に当たった。また、川上音二郎一座による、我が国で最初のお伽芝居の公演が、一九三一年一〇月、本

郷座で開幕するに際しては、小波とともに、その実現に協力した。さらに、○七年には、石川木舟、天野雉彦らを劇団員に、我が国ではじめての「お伽劇団」を組織、有樂座子供日の催しに、お伽芝居を上演するため尽力した。また、朝日新聞主催の実業家歐米視察団の係員として参加したのを機に知り合った野村徳七（野村証券の創業者）の援助を受け、東京青山に「早蕨幼稚園」を創立、明治期の幼稚園教育の先駆者の一人ともなった。この幼稚園を会場に、話術研究を目的とする「回字会」を定期的に開き、多くの口演童話家、雄弁家を育てた。第二次大戦後、五〇年には全国童話人協会を結成して、その委員長に推される。尾上新兵衛の筆名による『戦塵』（一九〇〇）のほか、『通俗雄弁術』（一六）、『童話術講話』（二八）、「童話久留島名話集」（三四）、『久留島名話集・角笛はひびく』（六一）など多くの著書がある。郷里の大分県玖珠町では毎年五月に久留島を記念する「日本童話祭」が催され、八四年には記念館の「わらべの館」が設立された。我が国の近代児童文化運動の先駆者としての業績を記念する「久留島武彦文化賞」（財団法人日本青少年文化センター）も六〇年に創設され現在に至っている。

「童話術講話」（どうわじゅ） 口演童話家としては第一人者の位置にある武彦には、童話口演について話したり書いたりした文章は数多く残されているが、単行本とし

てまとまつたものは、この一冊だけである（一九二八年、日本童話協会刊）。この本も、彼の執筆によるものではなく、一九二八年五月に日本童話協会主催で開かれた三日間にわたる講話の速記をもとにしたもので、旅行の多い武彦は校閲できなかつたと、後に不満を述べている。しかし、この一冊は武彦の童話術の実際を伝えるものとして高く評価されている。戦後、復刻版が出て、波多野完治が充実した解説を書いている（七三、日本青少年文化センター）。

【参考文献】生田葵『お話の久留島先生』（一九三九 相模書房）、草地勉『メルヘンの語部』（一九七八 西日本新聞社）（富田博之）

来栖良夫

よしお 一九一六—（大5—）児童文学

作家。茨城県江戸崎町生まれ。江戸崎農学校を卒業し、茨城県立青年学校教員養成所を中退後、小学校教師になつたが、一九四一年、生活綴方事件といわれる教師への弾圧によつて治安維持法違反で検挙される。四三年召集されて中国へ出征し、日中戦争の実態を体験的に知つた。四六年に帰国し、大久保正太郎、菅忠道らと雑誌『子供の広場』の編集などに当たつた。五三年から著述生活に入るとともに、日本児童文学学者協会、日本子どもを守る会、日本作文の会などに拠つて、児童文化運動に力を尽くしている。初期の著述活動においては、作文集や『父が語る太平洋戦争』全三巻（一九六九）、『少年少女おはなし日本歴史』全二四巻（七四）な

どの編著の業績が多く、ノンフィクションの歴史物語のレベルを高める上で大きな役割を果たした。創作で中心になるのは歴史小説で、宣教師が織田信長に献上した黒人青年が本能寺の変に出合うまでを語った『くろ助』(六八)で、第九回日本児童文学者協会賞を受賞しており、ほかに、農民一揆を主題にした『文政丹後ばなし』(七三)、大黒屋光太夫のロシアへの漂流記『光太夫オロシャバなし』(七四)、大島の波浮港を開いた秋広平六の伝記『波浮の平六』(八二)などがあり、正確な歴史認識と豊富な知識を基盤に、時代と人間がみごとに描かれている。戦争児童文学としては、第二次大戦末期の吳市を舞台にした『おばけ雲』(六九)、沖縄戦で捕虜になつた中学生を主人公にした『はだかの捕虜』(八二)などがある。『戦争と人間のいのち』(七三)は、アジアにおける侵略戦争の本質をえぐつたノンフィクションであり、『村いちばんのさくらの木』(七一)は、戦争と民衆の関係を軸にした日本近代史としての絵本である。ほかにも著書は多いが、民衆の視点で歴史や戦争を捉えるという姿勢で一貫している。『来栖良夫児童文学全集』全一〇巻(八三)がある。

【くろ助】^{くろ} 長編児童文学。一九六八年刊。カルサ
ン弥助(通称くろ助)は、宣教師が織田信長に献上した
黒人の若者である。馬まわり役として信長に仕えた弥
助は、その特異な風貌や素朴な人柄で人気者になつた。

本能寺の変のとき、精一杯の抵抗の末とらえられたが、
助命された。南蛮寺にたどりついた弥助は、故郷アフ
リカの大地と家族とを夢みるのだ。本能寺の変の一
日と、弥助の運命を語ることによって、当時の世界のひ
ろがりと歴史の動きをもみごとに浮かびあがらせてい
る。

(長谷川潮)

クルツクシャンク ジョージ George Cruikshank
一七九一—一八七八 イギリスの挿絵画家、風刺画家、
社会改良家。ロンドンで彫版師の子に生まれる。社会
や政治に対する風刺画家から出発して、グリム昔話集
の最初の英訳書(一八二三)に添えた挿絵で高い評価を
受け、ディケンズの諸作品に挿絵を描いた。また、社
会の乱れの元凶を飲酒にありとみて禁酒を強力に訴
え、『The Bottle 酒』(四七)のような絵物語のほか、
『Fairy Library 昔話文庫』(五三以降)を出して禁酒主
義に基づく昔話の再話を行つた。

(吉田新二)

クルマン ハリー Harry Kullman 一九一九—

スウェーデンの作家。イースター休暇中行き場のない
若者に目を留め、それをヒントに書いたデビュー第二
作『真夜中の暴走』(一九四九)が好評を得た。クルマン
作品の主人公は、内氣で夢みがちな人間が多い。『デ
ビッドのひみつの旅』(五三)の主人公もおとなしい少
年だが、ある日いつもの生活圏から踏み出し、新しい
世界や人々と出会う。彼はこの作品で、ニ尔斯・ホル

ゲルツソン賞を受賞した。

(木村由利子)

グレーアム ケネス Kenneth Grahame 一八五九—一九三二一 イギリス児童文学の不朽の名作『たのしい川べ』(一九〇八)で知られるイギリス児童文学を代表する作家の一人。五歳の時に母を失い、テムズ河畔のクックカム・ディーンの祖母のもとに預けられるが、この地がのちの作品の舞台となつた。グレーアムはやがてオックスフォード大学進学の望みのかなわないままイングランド銀行に勤めるが、その後ファーニヴァルの勧めでエッセイを書きはじめる。そして『The Golden Age 黄金時代』(一八九五)と『Dream Days 夢見る日々』(九八)で、「子ども時代を描く隨筆家」として広く世に迎えられた。人間と仲良くしたいといふ「おひとよしの竜」の話は後者の中の一挿話である。遅い結婚をした後に一人息子のアラステアが生まれるが、『たのしい川べ』はこの一人息子に寝物語に語ることからはじまつた。愉快なヒキガエルの話にアラステアは声をあげて笑い喜んだといわれる。「もつとも單純な生きものが、かれらの生の中で味わうもつとも單純な喜びの物語」と作者のいう作品は、まず子どもの国の人形スタッフと異名をとる乗物狂のヒキガエルの冒險の話で、その動きに富むプロットの展開と、徹底して自己中心的なこの人物の激しい感情の起伏がもたらす喜劇性がよく子どもの心を捕らえた。そこには同

時に川辺や森に棲む動物たちの生活と四季の移りが描かれており動物たちのユニークな性格化を伴いながら、イングランドの田園の世界が味わい深く伝えられる。そしてこの動物たちの話は時折彼らの体験する神秘的な世界への広がりをも示すのである。「あかつきのパン」の章にみられる牧神にはかならないパンとの出会いなどがそれである。これはまさに「豊かな心のうんだ、豊かな世界」(スミス)であり、またさわめてイギリス的な世界でもある。作品がイギリス的であるゆえんは、森に棲むアナグラマにイングランドの田舎の姿が彷彿されるといったことにある。

(谷本誠剛)

グレイ・アウル → アウル、グレイ

クレイン ウォルター Walter Crane 一八四五—一九一五

イギリスの絵本作家、画家、装飾美術家。肖像画家の子として生まれ、ロンドンの木版工房リンクトンに徒弟入りし、一八歳で自立。彫版師エバンズに見込まれ木版多色刷りの芸術性に富む絵本を一八六五年から制作、現代絵本の基礎を最初に確立した。『The Baby's Opera 幼な子のオペラ』(一八七七)他二編の二部作「ベイビーもの」が代表作。中世の装飾写本の画法を復活、日本の版画やイタリア絵画の影響のもと制作した絵本は、輪郭線の強い細部のこまかい、色は平塗りの、書き文字による手法を特徴とした。後年はW.モリスらと組んで壁紙、モザイク、敷物などのデザイ

ンに活躍し、工芸の歴史、理論に関する著作を表し、社会主義運動にも積極的に参加し、王立美術工芸学校の校長や美術工芸協会の初代会長も務め、一九世紀後半のイギリス美術界の指導的役割を果たし、強い影響を後に残した。我が子に手づくりの絵本を多数残している。

(吉田新二)

クレスウェル ヘレン Helen Cresswell 一九三四
イギリスの作家で、詩的ファンタジーとユーモアの持ち味で知られる。二〇〇〇人分の大きなパイをつくる話『村では大きなパイづくり』(一九六七)は、この作家得意の職人の世界を扱つたものだが、この途方もないパイの存在がまずユーモラスである。クレスウェルは状況と性格の双方から笑いをつくり出すのに優れている。『The Night-Watchman 夜の見張番』(六九)、『The Bagthorn Saga バグソープ家の物語』(七七)など作品数は多い。

(谷本誠剛)

クレヘニヒミ マリヤッタ Mariatta Kurenniemi 一九一八 フィンランドの児童文学作家。空想力豊かな作家で幅広いジャンルで作品を残している。とくに、『Oihinen Onnimanni むかし、オンニアンニがいたところ』(一九五三)、『Kuinka-Kum-Maa on kaikkialla ふしぎな国はどこにある』(五四)、『オンネリとアンネリのおうち』(六六、二部作の第一)などが戦後フィンランドのファンタジー童話の世界を広げた。ナンセン

ス、リアリズム、詩、劇、翻訳作品など多数。トペリウス賞、児童図書賞受賞。

(高橋 静男)

黒岩 達香 (くろいわ だつこう) 一八六二—一九二〇(文久二—大九)
新聞記者 新聞経営者、評論家、翻訳家。本名周六。

高知県安芸郡川北村の生まれ。大阪英語学校を経、慶應義塾中退。一八七九年上京後、黒岩大の名で政論演説を試み、政治に関心を示し、八二年北海道開拓使事

件につき「東京輿論新誌」上で政府要人を攻撃して起訴される。以後「同盟改進新聞」「絵入自由新聞」「都新聞」の主筆を歴任、九二年自ら「万朝報」を創刊する。八七年ごろからヨーロッパの小説を次々と紹介し、人気を博す。小説人耶鬼耶(ひとかおにか)(一八八七)、「片手美人」(九〇)などは探偵小説の先駆であり、続く『大金塊』(九一)、「実業鉄仮面」(九一)、「幽靈塔」(九九)、「史伝巖窟王」(一九〇一)、「噫無情」(〇一)、「怪奇、冒險小説は一世を風靡し、多くの涙香ファンを出現させた。その翻訳の特色は、忠実な翻訳を避け、文章を自由に取捨し、登場人物に日本名を用いるなどの工夫にある。ユゴーの『レ・ミゼラブル』を『噫無情』と翻訳するところに代表されるようなくみな言語感覚は、通俗性を帯びた平明達意な文章を創出し、その翻案ものに独特の雰囲気を醸した。評論『天人論』(〇二)は、向上主義と靈魂の不滅を説いた人生論書ともいべきもので、『煩悶』を胸に抱いた当時の青少年に愛読され、版

を重ねた。ほかに『人尊主義』(一〇)、『青年思想論』(一一)、『社会と人生』(一九)などの著がある。

【参考文献】岡直樹『偉人涙香黒岩涙香とゆかりの人びと』(一九七〇) 土佐文化資料調査研究会、伊藤秀雄『黒岩涙香』(一九七九) 桃源社)

黒崎義介(くろさき よしけい) 一九〇五~八四(明38~昭59) 日本画家、童画家。長崎県平戸に生まれ、一九二六年上京、川端画学校に入学、翌年中央美術展初入選。三二年松山文雄らと新ニッポン童画会を結成、児童出版物にも執筆活躍。日本画の技術を生かした童画は今なお多くのファンをもつ。四六年日本童画会創立に参加、同四年童画研究会を主宰、後進を指導、六二年武井武雄らと日本童画家協会を結成、歿年まで同展出品。『よしぐけ昔語童画集』(一九六五)ほか多数。五一年、児童文化功労者として表彰される。義介福祉基金も設立。

よしき

(桑原三郎)

伽小説『狼少年』と題してはじめて翻訳(土肥春曙共訳)。著書に『少年膝栗毛』(一八九五)、小波と共著『日本昔話続話』全一四冊(一九一四~一五)。一八九五~一九一七年に『少年世界』『少女世界』『飛行少年』に『可憐児』『落花一片』など社会の底辺を描いた作品や、『パラソル物語』『片ゑくば』などの少女小説、『四川の激流』『怪峠の奇遇』などの冒險小説などがある。

(村榮喜代子)

クローチェ ベネデット Benedetto Croce 一八六六~一九五一 イタリアの哲学家、歴史家、評論家。自由主義的な立場に立ち、批評活動を通してイタリアの精神生活に大きな影響を与えた。若いころ、同郷ナボリのバジーレが方言で書いた、昔話集『Lo canto de li canti』お話のお話に出会い、その芸術性と民俗学的価値に着目して、半生をかけて現代イタリア語に訳し注をほどこして、『十日物語』に倣つた題『Pentamerone pentameron』(一九二五)を採用した。

(剣持弘子)

畔柳二美(くわや みなみ) 一九一二~六五(明45~昭40) 小説家。旧姓遠藤。北海道千歳の生まれ。平凡な結婚生活を営んでいたが、大東亜戦争で夫が戦死。傷心をいやすため文学に専念した。戦争の爪あとを追求した『限りなき困惑』『風と雲と』などのほか、自伝小説『姉妹』(一九五四)で注目された。毎日出版文化賞を受賞し

黒田湖山(くろだ こうざん) 一八七八~一九二六(明11~大15) 小説家、少年少女小説家。本名直道。滋賀県甲賀郡水口町に生まれる。一八九六年に上京、巖谷小波の門下生となる。九年中央新聞社勤務を経て、一九〇一年(明34)『美育社』を興し、雑誌『饒舌』、少年雑誌『日本』を発刊。のち終生、記者、出版事業に従事しつつ、小説、俳句、少年少女小説を発表。一八九九年「少年世界」に、キブリングの『ジヤングル・ブック』を、お

説家、少年少女小説家。本名直道。滋賀県甲賀郡水口町に生まれる。一八九六年に上京、巖谷小波の門下生となる。九年中央新聞社勤務を経て、一九〇一年(明34)『美育社』を興し、雑誌『饒舌』、少年雑誌『日本』を発刊。のち終生、記者、出版事業に従事しつつ、小説、俳句、少年少女小説を発表。一八九九年「少年世界」に、キブリングの『ジヤングル・ブック』を、お

向日的な人生觀がさわやか。『こぶしの花咲くころ』(五)

(江刺昭子)

六)はその統編。

桑田春風 くわいた しゅんぷう 一八七七(一九三五)(明10) 昭10

詩人、唱歌作詞家。本名正作。千葉県東金市に生まれ、東京専門学校(現早稲田大学)卒業。一時同校講師を務めた。

「帝国文学」に新体詩を発表(一八九九)以後詩壇に認められたが、また一方で『一宮尊徳』、『虫の樂隊』など言文一致唱歌の創作に当たつた。詩壇を退いたのは比較的早く、以降「手紙雑誌」の発行、書簡文に関する著述、「少女画報」に少女詩を書き、児童読み物の刊行に力を注いだ。

桑田次郎 くわいた じろう 一九三五(昭10) 漫画家。

本名二郎、大阪府に生まれる。描き下ろし単行本『宝

剣流星丸』(一九五五)などを経て、『まぼろし探偵』(五)

七『少年画報』、川内康範作『月光仮面』(五八)『少年ク

ラブ』、平井和正作『8マン』(六三)『週刊少年マガジン』

と連載、いずれもテレビ化されて人気を呼び一世を風靡した。不祥事件で漫画界から消える。『マンガエッセイでつづる般若心経』第一巻(八五)を本名で描き下して復活した。

桑原三郎 さぶらう 一九二六(大15) 児童文

学研究家。群馬県に生まれ、慶應大学心理学科を卒業。慶應幼稚舎教諭を務めるかたわら、児童文学の研究に従事、『鈴木三重吉の童話』(一九六〇)で注目された。

(石子 順)

著書に『赤い鳥』の時代』(七五)、『諭吉、小波、未明』(七九)、『少年俱楽部の頃』(八七)の三部作のほか『児童文学と国語教育』(八三)、編著に『鈴木三重吉童話全集』全一〇巻(七五)がある。(細谷建治)

軍記物 むんき 物語ともいいう。一〇世紀の『將門記』から、『保元物語』『平治物語』『義經記』『曾我物語』など中世のものを経て、近世の『信長記』『太閤記』などに及ぶ戦記文学の総称。琵琶に合わせて語られた『平家物語』の平曲、無伴奏で朗誦調の『太平記よみ』『軍記よみ』などの語り方がよく知られている。「軍記よみ」は講談の前身。内容は謡曲・淨瑠璃・歌舞伎などに絶大の影響を与えた。現代の児童文学の中でも繰り返し再話されている。

(益田勝実)

クンツェ ライナー Reiner Kunze 一九三五(ド

イツ)の作家、詩人。東ドイツのエルスニツツに生まれ、ライプチヒ大学の助手となつたが、やがて著作家となり、一九七七年に西ドイツへ移った。詩人として名高いが、はじめて書いた童話集『あるようないような話』(一九七〇)によつて西ドイツの児童文学賞を得た。小品集『素晴らしい歳月』(七六)では、東ドイツの日常生活を鋭く風刺的に描いている。(野村 波)

クンナス Mauri Kunnas 一九五〇(フィ

ンランド)の絵本作家。ヘルシンキ工芸大学でグラフィック・アートを専攻。アニメーション、漫画、新

聞の社会戯評を経て、絵本の制作に専念。『フィンランドのこびとたちトントウ』(一九八二)、『Koiramäen talossa ワンワン丘』(八〇)など、フィンランド文化を樂しく伝える絵本は自国で好評を博す。『サンタクロースと小人たち』(八二)が一二カ国で翻訳出版されて以来、世界的人気を獲得している。

(稻垣美晴)

ケ

ケイ エレン Ellen Key 一八四九—一九二六 スウェーデンの女流思想家。地主貴族の家に生まれ、開明的な政治家だった父親の影響を受ける。一八八〇年から二〇年間、ストックホルムの私立中等学校の教師や、労働者学校の講師などを経験した後、著作活動に入つた。北方の貧しい農業国から工業国に脱皮しようとする大きな変動の時期を迎えていたスウェーデンの社会を背景に、抑圧されていた婦人や児童の解放を主張する大胆な発言をして、国内はもちろん、国際的にも広く注目される多くの業績を残した。中でも、二〇

世紀の到来を前に発表された『児童の世紀』(一九〇〇)は、国際的な反響を呼び、各國語に翻訳紹介されて、今世紀初頭の児童中心主義思想や、新教育運動のバイブル的役割を果たした。わが国でも一九〇六年に、大村仁太郎によりドイツ語版からの最初の翻訳『二十世紀は児童の世界』が出た。その後、英語版からの原田実訳『児童の世紀』(一六)が出て広く普及し、現在は原語訳(七九、小野寺信・百合子訳)も出している。

(柳沢重也・富田博之)

兄弟 *しゃうじ 「姉妹」と同時に発行された少年雑誌。国学院大学出版部。一九〇九年(明42)六月創刊、一九〇一月、一〇銭。編集兼发行人目黒和三郎名義になつてゐるが、編集担当は畠山健(波多野勤子の父)、遅れて藤沢衛彦が担当。同大の教授陣の協力を得て知識情報読み物が書かれ、文芸読み物は、三島霜川、水野葉舟、小島鳥水、服部躬治らが主に執筆した。お伽噺を抜け出る小説風な志向がみられ、全体として均整がとれた新雑誌といわれた。

(滑川道夫)

ゲイ ミシェル Michel Gay 一九四七— フランスのイラストレーター、絵本作家。父はトランペット、祖父はクラリネット奏者の音楽一家で、小さいころから、音楽と絵の才能を認められ、ロック・グループに入つてレコードも出す。絵本は『白いふくろうと青いねずみ』(一九七五)を皮切りに、『バランティヌ』シリーズ